

著者のシュネーデルバッハ (Herbert Schnädelbach 1936～) はアドルノに師事した現代ドイツの哲学者。本書『ドイツ哲学史 1831-1933』が取り上げるのは、ドイツの「哲学的現代」と言われる時代の百年間の哲学史である。その幕開けとなった1831年はヘーゲルが世を去った年であり、彼の死とともに近代の「大哲学」が没落を開始した。また1933年は、ヒトラー率いるナチスが政権を獲った年であり、このときドイツの哲学思想は右も左も総崩れになってしまった。その上、とりわけハイデガー哲学の重力圏にある思想史的理解の下では、この百年間がしばしば哲学の「空白期」のように理解されている。実際、ハイデガーやヴィトゲンシュタイン (著者はルカーチも挙げている) が1920年代に与えた大きな衝撃により、この百年間の哲学的伝統が一挙に色褪せたものにされ、脚註で取り上げられる程度にまで過小評価されるに至った。

だが、果たしてその通りだろうか。実はこの百年間は、非常に実り豊かな哲学的伝統が形成され、ダイナミックに展開した時期でもある。本書は、哲学的テーマごとに、この間のドイツ哲学史を取り上げて丹念な講評を行っており、学ぶところが非常に大きい。これらテーマは次の7つがあり、それぞれ章単位で論じられる。すなわち、「歴史」(二章)、「学問/科学」(三章)、「理解」(四章)、「生」(五章)、「価値」(六章)、「存在」(七章)、そして「人間」(エピローグ)である。これらのテーマ群に対して、文化哲学、価値哲学、生の哲学、形而上学、現象学、解釈学などの諸学派がさまざまに交錯し合いながら、さまざまな議論を展開しているのである。

この哲学的潮流は幾ばくかのタイムラグを伴って、日本のアカデミズムの哲学にも大きな影響を与えている。また、明治・大正・昭和初期の我が国の知識人の多くが、ほぼ同時代のドイツの哲学書を原書なり翻訳書で読んでいた。この影響はかなり後年になるまで続き、私が学生だった1980年代頃の哲学科でも、デカルトやカントなど古典的著作は別として、この百年間のドイツ哲学思想を準古典的なものとして重視していた。その最後の光芒は、第一次世界大戦前後の時期であった。マックス・シェーラー Max Scheler (1874～1928) は、この時期に多方面の思想的分野で活躍した一人である。

私は、シェーラーの人格概念について卒業論文を、またシェーラーの宗教哲学で修士論文を書いたが、本書を通じて、彼がこれらテーマのいずれにも深く関与して研究を進めていたことがあらためて分かった。それを本書のテーマ群の言葉を用いて表現するならば、次のようになるだろう。シェーラーは、「人間」の倫理の構造を、「価値」位階から独自に「理解」する「学問/科学」として、実質的価値倫理学を構想したが、彼の視圏はやがて「人間」そのものの「存在」に向い、その「生」と「歴史」の意味を独自に掘り下げながら、哲学的人間学の先駆けをなしたのだと。彼は働き盛りの53歳で亡くなったが、もっと長生きをしていれば、これらの哲学的諸領域においてより大きな貢献ができたと思える。

ただ、時代は急速に暗雲を漂わせていた。言うまでもなく1933年の「第三帝国」の成立である。この年以降、第二次世

界大戦終結まで、ドイツ哲学の主要諸潮流がいずれも圧服させられた。学术界にも及んだナチスのユダヤ人迫害は、ユダヤ系ドイツ人だったシェーラーの著作も発禁にしてしまったのである。

ドイツの「哲学的現代」の変遷と学派的・思潮的展開を独自に纏めあげた本書の中で、読者が最も示唆を受けることの一つは、哲学の学問的性格の変容に

関する論述であろう。ヘーゲルの死とともに哲学的体系構築の野望は潰え去り、19世紀は経験的な個別科学勃興の時代となった。この「科学の時代」のただ中であって、哲学は自らも科学たらんと欲し、あるいは科学の基礎づけを行うのが自らの使命であると信じた。しかし、前者は哲学がかえって自らを否定させるものであって、そもそも不可能な試みであり、後者のほうは自立した個別科学からしてみれば、全く不要な試みでもある。それどころか、哲学はいまや、自らの存在の正当性を繰り返し証明せざるをえなくなってしまう。その意味で言えば、哲学のアイデンティティの危機は、「学問/科学」そのものの転機でもあった。

こうした状況の下、ドイツの哲学界では、哲学の復権を図ろうとする三種類の探究が行われた。一つは認識論としての哲学の復権である。これは主に新カント学派が批判哲学の方法を用いることで行われた。二つ目は領域科学としての哲学の復権である。これには哲学ならではの探究領域 (例えば価値) を扱うヴァインデルバントの価値哲学と、「所与の現象」を探究するフッサールの現象学とがあった。第三は知の総合あるいは総合学問としての哲学の復権であり、W・ヴェントの「帰納的形而上学」の試みがそれに該当する。

これらの探究の中から、時代を超えて今なお大きな影響を及ぼしているのは、フッサールによる現象学の試みであろう。彼の現象学の構想は時代的に大きく変化しているが、最も重要なのは最晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』である。フッサールもまたユダヤ人であったために、ドイツ国内では著作発禁、教授資格剥奪など、その活動が著しく制限されていた。実を言えば、彼のこの研究は、シュネーデルバッハが「哲学的現代」の幕を閉じさせたナチス政権成立後に、当局の目をかいくぐってベオグラードで公刊され、その後、一巻の著作としてまとめられたものである。この著作は、ヨーロッパの諸科学の危機 (転機) を最も深く見抜き、その基盤となる「生活世界」を解明することによって、哲学の復興を目指した研究として、今日ますます大きな意義を有しているのである。

